

余に慰藉を興へたる模様畫本

秋田 綠

葉

余に慰藉を興へた模様畫本とは余の附した假名で決して新機  
發明品でも何んでもない、たゞ玩弄物として、世に有りふれた  
無邪氣なる遊戯的一の目鏡に過ぎない。まだ頑是ない入校前  
の時は、彼を最も愉快なる物として楽しんでいたのであつた。其  
以後は忘れてゐたが、鉛筆畫を書いて居たのが初めて其れに彩  
色を施して模様畫を學ぶ様になつたので、意外にも昔の無邪氣  
なる遊戯的玩弄物の彼を新しい記憶によび起したのである。  
其れと云ふのも彼はよく様々の模様を現はすから或は參考の資  
ともなるうかと思ふたのが果して余の想像通りであつた。其拵  
方は此に記する迄もないが先づ巾二寸縦八寸程のガラスの細長  
い板を三枚を、各々縦の切口と切口とを合して三測面を有せる  
角罫を作り、其外面をば黒き紙を以て覆ひ一方の口には白色の  
薄き紙を張りばこの器械は出來上つたのである。其が出來たら  
今度は其中に、細かき色々の紙切なり花瓣なり、自分の思ふが  
まゝの物品を入れ(但し一度にあまり多數を入れざるを可とす)  
手を以て其をふり中を覗く時は、其度毎に千差萬化種々様々の  
彩色を有せる美麗なる模様が現はれる。この器械によれば、我  
々初學者の最も辛苦した形のとりよう色の塗り様など座ながら  
彼の自然の模様を書く事ができるのである。今は彼を模様畫に

於ける活手本とし座右の師とし彼に因つて慰藉ある教訓を興へ  
られてゐる。

スケッチの一時

長野花咲町

パレツト

筆を動かし初めたら一切夢我夢中、  
三脚が倒れ掛つたので氣がつくと後に人かゝる。ハツと振りむ  
くと同級のK君とT君だ始めて話をする。村の少女が軟かい春  
の目を被つてる白い手拭一ぱいに浴びて來る。一寸見て行き過  
ぎる。友も去る。後は一人ぼっち。前の榮の花の間から雲雀が  
バツと舞ひ上る。汽車に驚かされて……影は最う見えぬ。今  
度は何が來るだらう。

命

「繪ばかり書いてゐて何うするんだ」と何時でも親父の目玉が  
光るのだ、と同時に頭も。今日も「一寸先生の所へ行つてくる」  
と門を出た。  
肩には何時の間にかスケッチ箱が掛つてゐる右手はしつかり三  
脚を握つてゐる。  
何處と云ふあてもなく只無意識にブラブラ歩いてゐる。  
繪は矢つ張り僕の生命だ。